

## 魔女と王様

とつても小さな九つの国——3

あわなみりようさく

54 まやかしだ

「魔女の炎はまやかしだ。決して人を殺めることはできないのだ。兵士たちよ、邪悪な魔女王を討つのだ！」

ニーダマが叫んだそのとき、魔女たちの背後から、エリユーを先頭にした十人の兵士が戻って来ました。どこまで行っても魔女の住処が見つからず、とうとうあきらめて戻って来たのです。

「エリユーか！」

ニーダマの言葉に、はっとしたザネリの炎が、ゆらりと弱まりました。

「今だ、射よ！」

びゅびゅー！

ニーダマの言葉とともに、兵士たちの矢が一斉に放たれました。でもそんなことでひるむ魔女王ザネリではありません。両手の指をいっぱい広げ、前にかざすと、そこに炎の壁が現れました。放たれた矢は炎の壁を通り抜けることができずに、またたく間に燃え落ちてしまいます。

「……」

兵士たちは無言で、燃えさしとなった矢を見つめています。その様子にザネリが満足げな笑みを浮かべたときです。突然、五人の魔女の背後からエリユーの兵士たちが馬で襲いかかりました。馬の前脚でけられては、さすがの魔女もたまったものではありません。

堂々と立つザネリひとりを残し、魔女たちはもんどりうって倒れました。たいそう驚いたザネリがひとりの魔女を抱き起こそうとしたとき、兵士たちの矢がその反対側に倒れるひとりの魔女に注がれました。倒れた魔女は矢を防ぐこともできません。幾本もの矢が刺さった魔女は、あわれ命を落としてしまったのです。

「おのれー、人間どもめ！」

ザネリが恐ろしい形相で、矢を放った兵士のひとりに炎を浴びせます。大丈夫だ、決して魔女は人間を殺めることなどできないのだから——。ニーダマがそう思ったのもつかの間、兵士の体は真っ赤に燃え上がり、悲鳴を上げながら砂ぼこりを上げて地面を激しくのたうち回り、やがて動きを止めました。ニーダマの考えはまちがっていました。兵士は、絶命してしまつたのです。

「な、なぜだ……」

ニーダマは驚きのあまり弓を持つ手をだらりと下げ、口を開けたまままで動けずにいきました。

「魔女王以外の魔女は強くないぞ。馬で襲え、ひとりずつ射よ！」

魔女たちの背後にいたピーテルが叫ぶと、馬に乗った二十人がまたも襲いかかります。

どどどどどど——！

ザネリは炎の壁を作り魔女たちを守ろうとしますが、さすがに二十頭もの馬でいつせいに襲いかかれてはたまったものではありません。とたんに三人の魔女が倒され、そのうちのひとり兵士たちの矢を浴びます。倒れた魔女は矢をはね返すことができませんでした。兵士たちはあつという間にザネリ以外の魔女を血の海に沈めてしまつたのです。

「止めろー！ おろかな人間どもよ、今までどんな気持ちでお前たちを守つてきたと思つているんだ！」

ザネリの怒り狂った炎が、二人の兵士を包みます。兵士たちの体は燃え上がり、悲鳴を上げて転げ回ります。しかし炎を必死で操るザネリに、またも背後から馬が襲いかかります。ザネリはぼつと振り向き、髪の毛を炎のように逆立てて両手から青い炎を噴き出させます。二人が落馬し、ひとり馬の上で燃え上がります。馬は驚きと恐れでめくらめつぼうに駆け、燃える兵士を振り落します。

とうとう、三人の兵士の命が失われてしまいました。

でも、ザネリの怒りはそんなことではまるきり収まりません。ニーダマへ向けて怒りの炎を発しようとしたとき、それは起こつたのです。

〈つづく〉